

## 文化・経済フォーラム滋賀発足 10 周年記念講演会

演題：「コロナ新時代 元気が出るのう（脳）」

講師：東京大学名誉教授 養老孟司氏

養老でございます。久しぶりに大津に参りました。

今、(びわ湖ホール声楽アンサンブル公演の) オペラを聴いて、自分の母親を思い出していました。うちの母は明治 32 年・1899 年生まれ。さっきの『闘牛士の歌』を「浅草でエノケンが歌うのを聞いた」とよく言っていました。赤いマントを着て、颯爽とエノケンが出てきて歌うという思い出話をしていました。オペラのパロディが人気を博すぐらいに、当時の人は普通にオペラを聴いていた。お客さまがいたわけですから。何でもそうですが、こういうものはやる方と受け取る方があるわけで、文化は受け取る方が非常に大事です。『闘牛士の歌』をオペラでちゃんと聞いて覚えている人でないと、エノケンが赤いマントを着て歌っても、おそらく面白くもおかしくもないでしょう。

私は 84 才になります。私と同じ年といいますと、つい昨日あたりまで話題になっておりました、オリンピックの組織委員長の森元首相です。私がずっと生きてきた中で、男女の問題は社会の後ろ側にあった大きな問題の 1 つです。随分変わったなと思います。変わったことの 1 つが、日常生活ですね。一番大きかったのが、まずトイレではないかなと思います。水洗トイレが普及しました。

それ以外にも、いろいろ変わってきました。今、典型的なのはスマホですね。AI と言っていますが、artificial intelligence・人工知能です。多くの方が、人工知能そのものが進んでくると、どんな職業の人が失業するだろうとか余計なことをいろいろと書いています。私はそういうことはあまり関心がなくて、スマホを使っていると、暗黙のうちに何が変わってくるかということを考えます。

スマホに出てくるものと実際の世界は違うことは分かっているのですが、実際の世界とスマホの世界で本当に違うのは何だろうと真面目にお考えになったことはあるでしょうか。一番違うのは時間です。スマホの世界では、ある種の時間が流れません。つまり止まっています。YouTube を見ていると「動いているじゃないか」と思うかもしれませんが、根本的には動いていない。次の日に見ても、1 ヶ月たって見ても、同じものを見ることができるからです。スマホの中で動いている猫は死にません。永久に同じ動きを繰り返しています。ところが、実際の生き物はそういうわけにはいかない。

スマホの世界、あるいはコンピュータの中の世界を当然として受け取ってくると、物事というのは永久に続きうると思ってしまう。諸行無常というのは、時間がたったら全てのもので変わっていくということですが、世界中で人間が一所懸命つくってきた IT・information technology や AI・artificial intelligence の最大の特徴は、時間と共に変化しないものを中心に置いたということです。昔から時間と共に変化しないものは、いろいろな言葉で言われていました。真理が典型です。昔も今も真理は変わらないと習ったと思います。でも、今は何であろうが変わらないのです。どうすればいいかというと、パソコンに入れちゃえばいい。そういうものを、私は情報と呼んでいます。書かれたものでも、動画で撮ったものでも、全ては情報です。そういうものは時間がたっても変わりません。だから、世界は変わらないもので覆い尽くされてきている。若い人はそういう常識が変わってきていますね。なぜ

かということ、1日6時間、意識のある間はスマホなりパソコンを見ているから。

テレビが普及したときに、まずそれが起こったわけです。テレビの画面というのは決して変わらない。映画も、何度映しても同じ映画です。皆さんがそれを実際にやると、毎回、変わってしまいます。だから文化、芸術、アートは、おそらくそこに価値があると思います。

皆さんは情報じゃありませんが、皆さんを情報化することはできます。写真を撮ればいい。あるいは、名前を付ければいい。名前は一生変わりませんが、それは皆さんを情報化していることだとお分かりかと思います。つまり、本人にとって名前は要りませんが、周りの人にとって名前が必要なのです。その人をその人として見る、情報化して見る。社会は情報化しないと成り立ちません。どうしてかということ、昨日の私と今日の私は違うと若い人に教えると、彼らは何と言うかということ「昨日、金を借りたのは俺じゃない。だから、返す必要がない」と、こうなります。

私がなぜそういうことに気が付くかということ、教育の世界にいたからです。情報というのは困ったもので、学生を情報として扱うと教育ができません。本人は変わらないんですから。根本的に教育の意味がなくなってしまう。さっきの（びわ湖ホール声楽アンサンブル公演の）『世界に一つだけの花』という歌。僕は、「変な歌を若い人は歌うな」と思っていました。だって、世界に2つある花はないのですよ。昨日の花と今日の花は若干違う。今日になると、若干しておれてくる。そういう感覚が消えていく世の中です。昨日こうだったものが、今日もこうだった。細かい点まで全く同じ。動画を見ていると、しみじみそう思います。そこまで安定したものを人間は手に入れてしまった。

デジタル化というのは、つい最近、起こったことです。全く同じコピーがつかれるようになった。ゼロックスコピーを覚えておられると思いますが、だんだん黒くなってくる。今のデジタルコピーは何回コピーしても元と全く同じです。これは「0」「1」の順序だけですから、その並びだけをきちんとコピーすればいいわけで、その間にノイズが入ってこない。ノイズのない世界が、現在の若い人の理想だと思います。

未来社会では皆さん自身がノイズだということはお気づきでしょうか。私は30年近く前まで東大の医学部におりました。医者の世界では、すでに患者さんそのものがノイズに変わっていました。どういう意味かということ、医者は患者さんを診ないで、カルテを見ている。血圧が幾つで、血糖値が幾つと書いてありますけれども、それは調べた時点での値です。目の前にいる患者さんの値ではありません。カルテを見て、あれこれ言う。検査の結果が出ないと、情報化されないと、医者は治療行為をしてくれません。当たり前で、検査もしないで治療でもしようものなら、後で問題が起こったときに医者が負けますから、絶対にまず検査します。情報化された人を正規の身体と考えます。情報化されていない生の皆さんは何かということ、それはノイズです。人間がノイズ化していく社会が未来社会です。

AIが非常に普及した世界で何が起こるかということ、現物が消えていきます。そういうことは考えなくても、体のどこかで受け止めていると思うんです。現物というのは、そのときどきのものです。皆さん方も、今日は今日の皆さん方であって、昨日でも明日でもない。今日の歌でもそうですが、今日聞いたものは今日の演奏であって、明日のものでも昨日のものでもない。これをCDにとれば、ずっと同じものを聞くことはできます。

AI中心の世界というのは、誰もが同じものを見ているという1つの見方に変えていく。皆さんは、一生、他人と同じものを見ることはできません。アートというのは、おそらくそ

こにはまり込んでいるんです。『モナ・リザ』は、何百年たっても『モナ・リザ』ですが、見る人は、その都度違います。同じ人が見ても、時間がたっていますから、当然、与える印象が違ってきます。アートというのは、どこかで一期一会というところがあって、そのとき、そのものに出会うということなんですね。それがどうして重要かという、われわれはひたすら変わっていくからです。同じ時がない。でも、AIが進んでいった世界では、同じになるはずだ、同じではなきゃいけないというふうに、どこかで思うんじゃないでしょうか。人は不思議で、同じにしたがるのです。

僕は、人は同じにすることによって人になったと考えています。ここにおられる方は全員違う。皆さん、世界にたった1つの花です。だけど、言葉にしますと「人」と言ってしまう。もっと狭く取れば「大津の市民」とかです。同じに括ることをもって、人間は世界を上手に扱うことができるようになった。その反対は「違う」です。「違う」というのは感覚です。同じにするのは意識です。同じにすると何ができるかという、まず言葉ができます。赤かろうが、黄色かろうが、切ってあろうがなかろうが、リンゴはリンゴだろうと。

感覚に強く寄り添っている状況を、欧米風の考え方でいうと原始的、プリミティブと言います。子どもがそうです。子どもは感覚から入ってきます。「違う」から入ってきて、だんだん言葉を覚えて、同じことを学んでいきます。それが中学生になると算数になります。数というのは、同じの典型です。リンゴとミカンが1個ずつあって、合わせて2個と言っています。リンゴはいろいろな性質を持っているのに、それを1としてしまいます。

私が申し上げたいのは、見落としていることに気が付いてほしいということです。コロナによる死者は何人という、その「何人」の中の一つ一つを見ると大変な内容が入っています。若い人も、私のような年寄りも、家族のある人もない人もいろいろあるでしょうが、それを皆さんがテレビでご覧になっている限り「本日の死者は何人」になってしまいます。そこからは、感覚的な実態が全部消えています。そういう世界が、現在、人間が必死になってつくっている世界です。そういう世界では皆さんは番号ひとつになります。そういうふうに整理していきたい。だから、デジタル庁なのでしょう。

メールで話をする、声も聞こえないし、相手の顔色も分からない。どこかの会社の課長が怒っていました。「部下がメールで報告をしてくる。同じ部屋で働いているのに、何だ」って。よく見てみると、仲間同士もメールで話し合っているらしい。僕は「それは当たり前でしょう。課長の顔なんか見に行ったら、機嫌が悪いとか、そういうのが分かっちゃうでしょう」。そんなものを受け取るために給料をもらっているんじゃない。仕事の結果がちゃんと報告されていればいいでしょうと。そのときに現物の課長は何かというと、邪魔なんです。ノイズです。余分でしょう。顔色がどうであろうと、仕事に関係ないでしょう。

都合の悪いと思うものを全部、落としていった世界がAIの世界。私に言わせれば、同じでできている世界。情報は変わりませんから、安定しています。こんな安心なものはない。若い人たちにぜひ言いたいのですが、若い人たちは「自分は自分」と思っているかもしれませんが、実際はそこら辺の田んぼなり畑のなれの果てです。今、それを「環境」とかいう難しい言葉で言っていますけれども、環境なんてないですよ、将来の皆さん方自身です。そこで育っているイネは、将来の皆さん。その感覚を、現代社会は非常にはっきり失ってきています。元気が出るか出ないか分かりませんが、時間が来ちゃいました。(笑)あとは、ご自分でお考えいただきたいということで、ご清聴ありがとうございました。